

## 年間第十主日

マルコ 3・20-35

2018.6.10

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

子育てには夜泣きがつきものです。夜、急に子どもが泣き出すと、お母さんは子どもに向って「大丈夫、心配ない」と言いながら話しかけ、やがて子どもは何事もなかったかのように寝息を立てて眠ります。しかしそれにしても、何が大丈夫で、何が恐くないのか。まずは、確かに自分の家の中に怪しいものが潜んでいないことは安心するための大切なポイントです。家の中に猛獣が居て、寝ているうちに襲われると考えたら、誰も安心して眠れません。そういったものが外にいてもうちの中は大丈夫という安心感がなければ、家の中で誰もくつろぐことはできません。しかし、母親は実はそれよりももっと大きなことへの安心を語っています。それは「世界は大丈夫。人生は恐くない」と言っている。自分の力を超えるものしか保証できない安心をお母さんは、子どもに向って宣言しています。「わたしは無神論で、神様なんか信じていません」と言う人であっても、子どもに対して「大丈夫、恐くない」言う人は、そこに自分を超える方が子どもと自分を守ってくれるという安心感を持っているはずです。そうでなければ、誰も確信を持ってそんなことは言えません。

一般的には家族とは、「血がつながっていること」とか、「社会が認めているから家族」という考え方もあります。しかしそんな家族が大いなる安心の中に居ることを保証するのはわたしたちを超える方がわたしたちを守っていると信じることからやってきます。

洗礼を受けたわたしたちもお互いに血はつながっていませんが、同じ一つの家族であることを信じています。血がつながってなくても家族になるというのは、わたしたちキリスト者は年齢や民族や国籍を超えて、天の父の子どもとなっていることを意味します。天の父の子どもとなる資格は、こちらの努力や才能とは関係なしに神様から与えられます。

こうしてわたしたちと共に神様が住んでいるということが、家族の大きな安らぎとなっていきます。

血がつながらない者同士が今日も家族として美味しい食事、人によって味わ

いはそれぞれかもしれませんが、その食事をこのミサの中でいただいて、やがて社会に出かけていきます。社会に出かけて出会う全ての人に対して、「あなたの全ての人生とこの世界は神によって守られている、だから、大丈夫、心配ない」こと、そして全ての人には天の父に愛されていることを宣べ伝えることができますよう、共に祈りましょう。